

〔エッセイ〕

「謝る」の文化比較

栗 崎 由 子

筆者はヨーロッパで約30年間生活した。文化の違いに振り回されたことは無数にあったが、その経験から、特に「謝る」を切り口に文化の比較を考察できないかと考えるようになった。この小文では、そのような考察の問題提起としたい。

ヨーロッパ人はまず謝らない、
反対に、日本人はいとも簡単に謝る。

単純過ぎる言い方だが、そう言いたくなる経験は多かった。

例えば、ジュネーブ空港の、あるヨーロッパの航空会社のカウンターで。

私はカウンターにいた若い女性に何かを尋ねた。内容は忘れたが、その日フライトのある私にとって重要なことだった。すると彼女はこう答えるのだ、

「わたしは新人なので分かりません。」

ほら来た、と私は思う。しかしここで引き下がるわけには行かない。

「誰か分かる人に聞いて下さい」

「今誰もいません」

ああ、まただ。自分には〇〇のことが分から

ない。そして、目の前のお客のためにそれ以上のことをしない。

こういう問答は、ヨーロッパで何度も経験した。

悔しいので、私は一言余計な事を言ってやった。

「わたしはあなたに聞いているのではない。〇〇について、私に情報提供するのはあなたの会社の責任です」

カウンターの新入社員は、ポカンとしていた。目の前の人は何を言っているのか全く分からなかったのだろう。

これが、日本の航空会社だったらどうだろう？

まず、自分が答えられないことを丁重に謝り、すぐに他のスタッフに連絡を取るだろう。駆けつけたそのスタッフは、そこでまた私を待たせたことに対し謝り、最後に丁寧に〇〇について教えてくれるのではないだろうか？

筆者はどちらが良い、悪い、と言いたいのではない。日本とは文化が違うのだ。

最たるものは交通事故の経験だ。

ジュネーブに住んでいたときのことだ。ある夏の昼下がり、筆者は麦畑の中を抜ける道路を運転していた。クルマの通行は少なく、道路は直線で見通しは良かった。

突然、対向車が中央の車線を越えて、私に急接近！気づいたときは既に遅し。正面衝突だった。

幸い私は自力でクルマから外に出られた。

対向車を運転していた青年が私に近づいてきた。

彼は“Ca va?”（フランス語で、大丈夫？）とは言った。しかし謝らなかった。

頭はショックでフラフラだったが、わたしも「ふーん」と思って観察していた。謝らないことに対しては驚かない。ヨーロッパ人として予想通りの反応だ。だから腹も立たない。

ここで読者のために断っておくが、運転していた青年に悪気は全くないのだ。警察が来た時も、「自分が居眠りしていた」とすぐに非を認めた。

この事故が日本で起きたもので、事故を起こした青年が日本人だったらどうだろう？そう考えると、この場面で青年が謝らないところが面白くてたまらない。そして、そのような反応は彼に限ったことでは無いのだ、おそらく。ここには一体どういう思考回路があるのだろうか？



写真 交通事故で破損した筆者のクルマ

パリに住んだときにはこんな事故に遭った。

私は信号待ちで停車中だった。そこに、後ろからクルマがぶつかった。

追突したクルマを運転していた男が真っ先に言ったこと、「私はわるくない」。筆者もヨーロッパ人の言いそうなことの予想はついていたが、いざ我が身に起きるとやはり絶句した。

親からこのように躰けられて育つから、謝らない人間ができるのだ、と思ったことがある。

再びジュネーブ郊外でのこと。ブドウ畑の中の一歩道。そこは緩い坂だった。私はのぼり、相手は下りを走っていた。すれ違いざま、相手の車が私の車のサイドミラーに接触、わたしのサイドミラーは壊れた。

ぶつかってきたクルマを運転していたのは若者だった。彼はすぐさま父親に電話した。開口一番に「自分のせいではない」と、親に言っているのが私の耳に入って来た。

親は息子に、絶対に負けるな、とでも言ったのだろう、この若者は私に謝るわけがない。筆者はこうやって子どもは育てられるのか、

と私は思った。こういう躰を受けた人たちが、他人に易々謝るわけがない。

方や日本人はヨーロッパ人の真逆である。

自宅で開いた夕食会でのこと。遅れて済みません、と言って定時3分過ぎに玄関に入って来る人々。3分ぐらい、誰も気にしていないのに。

こんな場合もある。約束の時間よりも早く着いた人が、待ち合わせの相手が更に先に来ている場合、お待たせして済みません、と言う。なぜ「済みません」と言うのだろう？約束の時間より前に着いているのに。相手が、更に早く着いたのは相手の都合だろうに。

筆者は日本人の「謝る」も自分の非を認めているのではないとを感じる。むしろ、自分の非を自分で探し、自分で見つけた非に対して謝っているのではないだろうか。

日本人の謝る行為は、自分の過失を認めるというよりも、入場券のようなものだと思う。人に許しを求め、許して貰うことにより、その人と同じ仲間に入るのだ。謝って、頭を下げることは、「自分は敵ではない、あなたのお心に従います」という意思表示、つまり儀礼のような行為なのではないか？

そう考えると、色々なことの説明がつく。例えば、金銭の使い道が不明瞭だと指摘を受けた議員が「謝る」。それは、自分の行った行為に対してではなく、「世間の皆さんを騒がせた」「心配をかけた」ことに対して謝るの

だ。これもまた、入場券としての「謝る」行為である。自分も仲間に入れて下さい、と国民にお願いしているのだ。ことを丸く収めて下さい、自分をこれ以上追い込まないで下さい、というメッセージがそこには隠されている。

少なくともヨーロッパには入場券としての「謝る」は存在しない。謝ることは自分に非がある、責任があると認める行為だ。ここに、日本人の「謝る」気持ちとの間に大きなギャップがある。

このギャップを切り口に、文化の比較に切り込んでいくと面白いのではないか？